教祖生誕２００年記念講座「神人の祈り」

第４回　天地の道　　平成 26（2014）年 7 月 16 日

竹部弘（教学研究所）

一、明治の世と金光大神の祈り

１世と人の助かりを祈る(明治元年)

一つ、辰年（明治元）より丑年（明治 10）まで、十か年先、わが身の姿を見よ、末のため、お知らせ。（明治元年 7 月 27 日、覚帳 12―13）

天下太平、諸国成就祈念、総氏子身上安全の幟染めて立て、日々祈念いたし。（明治元年 9 月 24 日、覚帳 12―14―３）

当年より十三か年先、世の治まり、天下太平願い、楽しみ、辰（明治元）より辰の年（明治 13）までのこと。（明治元年 11 月朔日、覚帳 12―16―３）

社会への目と自分への目、両方の目を持つようにとの促し。その両方、全体を見守る目が予想される。

２新政と人心混乱（明治４～６年）

＊廃藩置県、四民平等、土地の売買解禁、徴兵令、学制、法律・貨幣の一新、改暦、地租改正など

＊人心の動揺と新政反対一揆

・旧藩主留任、コレラ予防・種痘・徴兵・解放令・太陽暦などへの反対

・生活の負担と不安

＊逆転・変転のイメージ

一つ、なにかのこと、淵が瀬になり瀬は淵となり、たとえのこと。大水の時、海のごとくと申すことあり。

一つ、備中逆川と元より申し、昔より申し、水が逆し流れるようになり。（明治４年９月 16･17 日、覚帳 15―10）

海川変わり、船着き場所ともなり。世は変わりもの。宮建て屋敷は、此方へ決まり。金光、氏子、先をせくな。おどろきから治まりになり。（明治５年８月 18 日、覚帳 16―20）

海川山でも、ずりこまんとは言われぬ。いかなる大社、金刀比羅でも。此方でも船着きにならんということもなし。世の狂いになれば変わるもの。先楽しみ。（明治６年旧 10 月 24 日、覚帳 17―29）

どうなるか分からない程に変わっていく中で、良いようになるかも知れない、強かなたくましさも窺える。

３「辛抱」と「先楽しみ」

金光大神の生涯についての、前半生の苦難から、後半生の助かりへという予想とは反対に、神からのお知らせで「辛抱」「先楽しみ」と諭されるのは、明治期になってからの方が、圧倒的に多い。

＊明治４年、強盗の噂（覚書 19―１～３、覚帳 15―１～５）
金光大神と出社が組んで、強盗を働いていると噂され、役人が調べに来て、無実であると証明されるが、参拝者は減少。

〈参考〉「広前歳書帳（教祖御祈念帳）」によれば、１日当たりの願い主平均件数が、明治３年は 48 件であったが、明治４年には 35 件となり、10 件以上減少。以後、５年 30 件、７年 24 件、８年 24 件、９年 23 件、10 年 19 件、11 年 21 件、12 年 25 件、13 年 29 件と推移（小関照雄「「広前歳書帳」（教祖御祈念帳）について」紀要『金光教学』第 27 号表（４）参照）。

＊明治６年、戸長（村役人）の命により神前を片付け、約一ヶ月間の神勤差し止め（覚書 21―３～８、覚帳 17―３～９）
・「荒れの亡所」―住む人もなく荒れ放題になった屋敷の意。
・旧２月 15 日、「生まれ変わり」の指示
・その２日後、「天地金乃神　生神金光大神　一心に願え　おかげは和賀心にあり」という書付をせよと命じられた。これは、天地書附の原型とも言うべきもの。
・再開後の旧３月 15 日、天地書附が定まる。

４「くぼい所」から

唐
　　日本　くぼい所へ寄り、同行水の寄るごとし。
天竺

（明治８年旧６月 13 日、覚帳 19―７―１）

＊水が低い方へ流れるように、様々な物事が日本に流れ込んでくるという関係の図像化

＊「くぼい所」からの翻り―低いところに沈み込み溜め込まれた力

二、天地の間のおかげ

天地金乃神と申すことは、天地の間に氏子おっておかげを知らず、神仏の宮寺社、氏子の家宅、みな金神の地所、そのわけ知らず、方角日柄ばかり見て

無礼いたし、前々の巡り合わせで難を受け。氏子、信心いたしておかげ受け。今般、天地乃神より生神金光大神差し向け、願う氏子におかげを授け、理解申して聞かせ、末々まで繁盛いたすこと、氏子ありての神、神ありての氏子、上下立つようにいたし候。（明治６年旧８月 19 日、覚書 21―21―３～７）

１神の目

＊宇宙飛行士の体験（立花隆『宇宙からの帰還』中央公論社、1983 年）

遠く離れた別々の土地が一目で見える。また、いま夜が明けている所と、日が沈もうとしている所も一目で見える。遠く隔たった、異なる時間の出来事が一目で見える。自分は、いま神の眼を持っているのだと感じたという。

＊金光大神の言葉

天地金乃神様は天地を一目に見とおし、守っておられる。（理解Ⅱ福嶋儀兵衛３―１）

天地の親神を一心に頼み、信心しておれば、天地の間を一目に見てお守りくださる神様がお助けくださるから、心配はない。（理解Ⅰ山本定次郎 13―２）

＊遠くから全体を一目に見る

そこで絹川が「金光様、大阪は広うございます。四区二郡に分かれておりますから」と申したら、金光様が、「ははは、大阪は広いなあ。しかし、けし粒よりは少し小さかろう」と仰せられた。（理解Ⅱ近藤藤守６―２）

＊寄り添う眼―徳永篤孝述『神様の目をもちたい』（金光教磐梨教会、昭和 59 年。平成 24 年金光教熊毛教会から再刊）

・病気を抱えた娘の一言から受けた衝撃。

・四代金光様お歌「雀あるく境内の土　われもあるく　二つのいのち土の上をあるく」から

人間は、年齢も体格も性格も、それぞれにみな違うが、「助からねばならぬ氏子」という一つの目で、同じように見られている。さらに人間と雀も。

ずっと遠い高いところからと、地面すれすれのところから、両方の目。

２生命（いのち）と真理（まこと）

「天地に生命ありて万の物生かされ、天地に真理ありて万の事整う」（神前拝詞）

・宇宙飛行士が暗黒の宇宙の中に輝く地球を見て、はじめは美しさや生命感に心惹かれるが、やがて弱々しさ・もろさを感じて、そこにだけ生命があることに感動する。

かくも無力で弱い存在が宇宙の中で生きているということ。これこそ神の恩寵だということが何の説明もなしに実感できる（立花隆『宇宙からの帰還』、中央公論社）

・顕微鏡で見た人体の細胞の美しさ

人間の体の中には底知れぬ海があり、宇宙がある。いったい、このような美しいものを誰が作ったのか。大きな存在、「神秘」という言葉でしか言いあらわせないものを感じる。（加賀乙彦『科学と宗教と死』集英社）

宇宙・人体いずれも科学の粋を集めた装置を通して、極大と極小の場面にいのちの実相が見出され、神の存在が導かれる。

・佐藤範雄『天地の大理』でも、金光大神が教えた「天」は、目に見えず感覚を超えたものでありながら、同時に形あるものの中にも見出され、それが大は「日月星辰」から小は「極微の微中」に至るまで内在すると説かれる。

＊宗教の値打ち（雑誌『アエラ』の特集で日本の宗教学者 50 人ほどに聞いた中から）

人間が宙に浮いたり、水上を歩いたりという超能力に人は驚くが、そんなものは驚くべきことではない。それ以上の何も産み出さないのだから。それよりも食物が消化され体の中で生きる力となることの方が、よほど不思議で値打ちのあること。更に不可思議で真に驚くべきことは、誠実や愛というような、掴むことも見ることもできない何かが、人間の心を養い、いかなる苦難にも耐えうるような力を生み出すということである。

＊神の差配

何事もみな天地乃神の差し向け、びっくりということもあるぞ。（明治６年旧４月４日、覚帳 17―14―１）

・「差し向け」：遣わす、送る。神の意向・教えや、差し向けられた者の使命。

・「何事も」「びっくりということも」：都合の良いことも悪いことも全て。

・「文明」と「偶然」と「神」―外国人の目に映った明治初期の日本人の姿。

お雇い外国人の医師に孫の足を治して貰った老婆が、神仏よりも医学と言われて、老女は彼に、この世界を構成する複雑な連鎖の神秘を示唆したのだった。（渡辺京二『逝きし世の面影　日本近代史素描Ｉ』葦書房、1998 年）

・天地に張りめぐらされた御縁の網の目

願う心は神に届くものである。天地金乃神は、くもが糸を世界中に張ったのと同じことである。糸にとんぼがかかればびりびりと動いて、くもが出て来

る。神様も同じことで、空気の中にずっと神の道がついているから、何百里あっても、拝めばそれが神に届く。女郎ぐものとおりである。（理解Ⅱ伍賀慶春５）

３天地、あめつち

木、茅、作物、諸事の物。天地とは雨土。あめつちなくては、木、竹、草、五穀、実入らず。信心いたせば、でき、実入りよし。（明治９年旧８月９日、覚帳 20―18―７）

・「天地」は「雨土」。「あめつち」を以て、刻一刻、生命の中へ吸収され育っていく意味合い。

・竹の生長と天地：命が最も弱くなった時に働き、竹の命をそのものたらしめるというような、天地の生成の力。

一つ、黒物、くろずみ、すみは黒し。世は黒むがよしということあり。暗うては物事見えんと言うが。
一つ、金光とは金光ると書き。明い方はだれでも見ようが。おいおいには明い方へ人が来る。
天地、あめつちを忘れな。ええかんのことを言うていけず、どうならん。のうてならん。水につかりてならず、土に埋もりてどうなるまいが。人間に大酒大食悪し。諸事万事ええかんがよし。（明治 10 年旧 10 月 13 日、覚帳 21―30）

・生活が豊かになる、暮らしがよくなることを「身が黒む」と言った。

・「金光」の意味―「金光る」

・天地の教えの強調。雨土の欠乏と過剰を共に戒めることにより、裏づけ。

４大いなる悠久

何事も変わることなし。月と潮の満ち干変わらんから、右のとおり。旧。
火難、中夭、災難、悪事、毒害払いのけ、別状なし、と仰せつけられ候。（明治６年旧８月 17 日、覚帳 17―22）

・循環し変わりつつ変わらぬもの
変わらぬものとしてあげられるのは、不動のものでなく、周期的な動きをもつ月と潮―気の遠くなるような、飽きることのない繰り返し＝有限の繰り返しによる無限の感覚

＊天地日月の心

「［…］われを出して、はやるは一年か二年か、長うて三年かはやるなり。神様のこしらえられたのは、みてる（尽きる）ことなし。天地日月の心になること肝要なり」金光様巳の年を説得くだされ、ありがたき幸せに候。また、そのうえに、「天地ははやることなし。はやることなければ終わりもなし」とのこと、金光様仰せなり。巳の年いただき、一生の宝なり。（理解Ｉ市村光五郎三―８）

＊天地のこと

天地のことをあれやこれやと言う人がありますが、人では天地のことはわかりませぬ。天地のことが人でわかれば、潮の満ち干がとまりましょう。（理解Ｉ近藤藤守９）

・「わかる」―天地のことを予測・判断・制御できるという思いと、天地が天地であることを止めるかもしれないという、恐ろしい逆説。

・いのちの不思議と天地の摂理

花びらのピンクは、幹のピンクであり、樹皮のピンクであり、樹液のピンクであった。桜は全身で春のピンクに色づいていて、花びらはそれらのピンクが、ほんの尖端だけ姿に出したものにすぎなかった」（大岡信『ことばの力』、花神社）

天地のことは、人の力におよびませんでなあ。神信心には、なにごともしんぼうすることが、一ばんたいせつでございます。［…］ありがとうてありがとうてならぬようになり、なんぼうお礼を申してもたりませんのじゃ。お礼のたりませぬおわびばかりしておりますが、もったいないことであります。（『金光様』、三代金光様御伝記刊行会、昭和 48 年、302～303 頁）

終わりに

一つ、金光大神、人が小便放りかけてもこらえておれい。神が洗うてやる。人がなんと言うてもこらえておれい。天地の道つぶれとる。道を開き、難渋な氏子助かること教え。日天四　月天四　金神をどうなりともしてみいと申しておれい。（明治９年旧６月 24 日、覚帳 20―16）